

# 東京産婦人科医会との 協力による乳房検診

## ■検診を指導した先生

(五十音順)

**青木基彰**

東京産婦人科医会副会長

**伊藤良彌**

東京都予防医学協会婦人検診部長

**岩倉弘毅**

東京産婦人科医会痛対策部長

**内田 賢**

東京慈恵会医科大学助教授

**榎本耕治**

山王病院

**大橋克洋**

東京産婦人科医会副会長

**落合和彦**

東京産婦人科医会副会長

**加藤治文**

東京医科大学教授

**北島政樹**

慶應義塾大学医学部教授

**小林重高**

東京産婦人科医会会長

**長谷川壽彦**

東京都予防医学協会検査研究センター長

(協力)

慶應義塾大学医学部外科教室

東京医科大学外科第1講座

東京慈恵会医科大学外科講座

## ■検診の方法とシステム

東京産婦人科医会との協力による乳房検診は、第1次検診(問診、視診、触診)を東京産婦人科医会(略称:東母)の会員の施設で実施、2次検診が必要とされた人については、東京都予防医学協会内に設けられた「東母乳房2次検診センター(2次検診センター)」で予約制により2次検診(問診、視診、触診、細胞診、マンモグラフィ、超音波断層撮影)を実施する。

2次検診センターの予約は、必ず東母会員の紹介を必要とする。なお、現在の東母会員は1,349人である。

2次検診センターでの検診の結果、精密検査あるいは治療が必要と判定された受診者については、2次検診の所見を記録した書類に依頼状を添えて、3次精密検査医療機関を紹介する。

紹介先の3次精密検査医療機関は、原則として慶應義塾大学医学部外科、東京医科大学外科第1講座および東京慈恵会医科大学外科講座第2としているが、実際には受診者自身の住所の関係もあり、上記医療機関以外の病院で受診されることが多い。

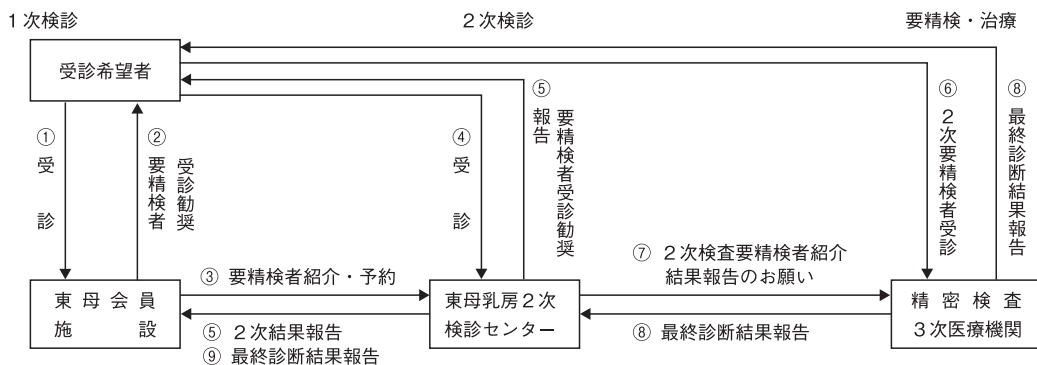
2次検診センターでは、協力医療機関以外の医療機関を受診した人について精密検査や治療内容について報告をしてもらい、データを把握するように努力しているが、受診先の病院も多岐にわたり、すべての病院を把握できず、また、受診先が判明しても十分な回答が得られないことが多いのが実情である。

また、東京都予防医学協会保健会館クリニック外来においても近年、乳がん検診の受診者は増加傾向にあり、ここでの要精検者も2次検診センターを受診している。

2004(平成16)年4月より乳がん検診の指針が改正され、視触診とマンモグラフィの併用検診が推奨されている。このため、東母会員(開業医)での乳房検診受診者の減少が推測される。

検診システムは下図のとおりとなっている。

東母方式乳房検診システム



# 東乳房検診の実施成績

榎本 耕治  
山王病院

木下 智樹  
東京慈恵会医科大学柏病院講師

長 東 美 貴  
東京医科大学

野 木 裕 子  
東京医科大学

## はじめに

東京産婦人科医会(略称・東母)が、各会員施設で行った乳房検診の2次検診施設として1981(昭和56)年10月に東京・市谷の東京都予防医学協会保健会館クリニックに開設した「東乳房2次検診センター(以下センター)」は、東母会員の施設で行った乳房検診(問診、視診、触診)で要2次検診とされた受診者を対象に検診を実施し、開設以来の延べ受診者数は11,011人に達した。

## 検診の実施体制と方式

乳房検診は、1次検診を東母会員の施設で行い、2次検診が必要と判定された人が東母会員を通じてセンターを予約し、受診する。センターでは乳がん専門医による視診、触診、マンモグラフィー、超音波検査のほか、必要に応じて針穿刺細胞診(ABC: aspiration biopsycytology)などの精密な検査を行い、さらに精密な検査あるいは治療が必要とされた人には、3次精密医療機関(慶応義塾大学医学部外科、東京医科大学外科、その他の乳癌学会認定施設)を紹介している。

検診では、1次検診医からの依頼状の内容を確認し、乳腺疾患の背景に関する問診票への記入、マンモグラフィー、超音波断層検査の後、2次検診医の診察が行われる。さらに、必要に応じて、乳房腫瘍に対するABCあるいは乳頭分泌物を材料とした細胞診が行われる。

## 検診成績

### [1] 受診者数

2004(平成16)年度の受診者数は、表1に示した1,670人で、初診数766人(45.9%)、要管理904人(54.1%)であった。2003年度に比べて要管理の受診者数の増加が著しい。

初診者の受診動機は定期検診が662人(86.4%)、自覚症状あり104人(13.6%)であり、自覚症状のない受診者が増加していることは、早期発見を目的とする検診の立場から考えると、のぞましい方向にある。

### [2] 受診者の年齢構成

受診者の初診時の年齢構成を表2に示した。40歳～44歳で121人(15.8%)、45歳～49歳で137人(17.9%)、50歳～54歳で122人(15.9%)、であり、40歳～54歳の受診者が全体の約半数を占めている。

表1 受診者数と受診動機

		(1981～2004年度)						
年度	区分	受診者数			受診動機(初診者のみ)			
		初診	要管理	計	定期検診	自覚症状	計	
1981～88		3,958	1,594	5,552	520	3,348	3,958	
1989～96		3,215	2,390	5,605	1,312	1,903	3,215	
1997		350	288	638	236	114	350	
1998		349	333	682	225	124	349	
1999		281	303	584	185	96	281	
2000		291	316	607	187	104	291	
2001		301	370	671	197	104	301	
2002		662	483	1,145	518	144	662	
2003		838	704	1,542	693	145	838	
2004		766	904	1,670	662	104	766	
(%)		(45.9)	(54.1)	(100)	(86.4)	(13.6)	(100)	
計		11,011	7,685	18,696	4,735	6,276	11,011	
%		58.9	41.1	100	43.0	57.0	100	

表2 受診者の年齢構成

(初診者のみ)		(1981～2004年度)											
年 度	～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70歳～	計
1981～88	65	272	420	658	811	705	543	250	108	71	30	19	3,958
1989～96	39	169	257	463	510	623	529	277	175	100	47	26	3,215
1997	1	6	16	50	59	58	63	46	28	12	8	3	350
1998	3	8	25	57	56	51	75	34	21	10	6	3	349
1999	2	3	19	32	48	55	48	32	23	8	4	7	281
2000	2	6	13	50	55	42	49	37	20	10	6	1	291
2001	1	6	20	47	50	48	55	32	17	15	8	2	301
2002	3	11	29	79	102	113	109	95	65	30	20	6	662
2003	0	13	32	90	119	162	135	122	70	46	30	19	838
2004	0	3	16	73	82	121	137	122	107	56	30	19	766
(%)	(0.0)	(0.4)	(2.1)	(9.5)	(10.7)	(15.8)	(17.9)	(15.9)	(14.0)	(7.3)	(3.9)	(2.5)	(100)
計	116	497	847	1,599	1,892	1,978	1,743	1,047	634	358	195	105	11,011
%	1.1	4.5	7.7	14.5	17.2	18.0	15.8	9.5	5.8	3.3	1.8	1.0	100

表3 受診者の臨床診断

(初診者のみ)		(1981～2004年度)										
年 度	診断	乳腺症	乳腺腫瘍	乳腺線維腺腫	乳がんおよび乳がん疑い	のう胞症	乳管拡張症	乳頭部痛	乳頭異常分泌	正常	その他	計
1981～88	1,736	389	489	26	172	52	31	67	435	381	3,958	
1989～96	1,424	126	353	170	273	21	1	41	501	305	3,215	
1997	182	2	40	15	38	1		2	52	18	350	
1998	180		53	13	40	2		1	40	20	349	
1999	168	1	41	16	18				16	21	281	
2000	181	1	44	18	24				8	15	291	
2001	192	1	42	17	13	1		1	11	23	301	
2002	424	4	69	26	44	5		3	39	48	662	
2003	510	12	81	36	81	2		3	54	59	838	
2004	275	10	66	64	128	7		8	118	90	766	
(%)	(36.0)	(1.3)	(8.6)	(8.4)	(16.7)	(0.9)		(1.0)	(15.4)	(11.7)	(100)	
計	5,272	546	1,278	581	821	91	32	126	1,274	980	11,011	
%	47.9	5.0	11.6	5.3	7.5	0.8	0.3	1.1	11.6	8.9	100	

[3] 受診者の臨床診断

初診者のみにおける2次検診の臨床診断結果を表3に示した。乳腺症275人(36.0%)、のう胞症128人(16.7%)、線維腺腫66人(8.6%)で2003年に比べて乳腺症が数の上では減少しているように見えるが、のう胞症の数は増加している。乳腺症とのう胞症との合計数は2003年度70.6%に対して2004年度は52.7%である。また正常者に関しては2003年度54人(6.4%)に対して2004年度は118人(15.4%)であった。乳腺症と正常、乳腺症とのう胞症の境界をどこに置か、検者間で微妙な差が認められる。

[4] 受診者(初診者のみ)の判定区分

2004年度の初診者766人の判定区分を表4に示した。「異常なし」、または「軽度の乳腺症」などで次年度以降1次検診医のもとで定期検診を受診するように指示した人が322人(42.1%)、センターでの経過管理を必要とした人が324人(42.3%)、要精密検査が96人(12.5%)、また、治療が必要とされた人は24人(3.2%)

であった。要精密検査に関しては、2003年度39人(4.7%)に対して2004年度は96人(12.5%)に増加している。また、治療を要すると判定された人も2003年度13人(1.5%)に対して、2004年度は24人(3.2%)に増加している。とりわけ、乳がんは11人(1.3%)から19人(2.5%)に増加している。3次精密検査を依頼した数は、2003年度は74人に対して、2004年度は210人で2.8倍

表4 受診者の判定区分

(初診者のみ)		(1981～2004年度)					
年 度	区 分	定 期 検 診	要 管 理	要 精 密 検 査	要 治 療 良 性 乳 がん	計	
1981～88	2,213	976	454	146	169	3,958	
1989～96	1,828	879	286	105	117	3,215	
1997	230	100	10	3	7	350	
1998	165	163	10	2	9	349	
1999	115	147	9	1	9	281	
2000	135	134	12	1	9	291	
2001	152	125	18	3	3	301	
2002	292	338	20	1	11	662	
2003	370	416	39	2	11	838	
2004	322	324	96	5	19	766	
(%)	(42.1)	(42.3)	(12.5)	(0.7)	(2.5)	(100)	
計	5,822	3,602	954	275	358	11,011	
%	52.9	32.7	8.7	2.4	3.3	100	

に急増している。その理由は、1) 乳腺症に対する針穿刺細胞診の結果報告に判定不能が増加したこと、2) マンモグラム上の微小石灰化像にマンモトーム生検が普及してきたので、カテゴリ3の石灰化に対して積極的にマンモトームによる病理組織学的確認を要望する被検者が多くなったこと、3) 超音波断層検査によって乳管内病変を描出できる症例が多くなり、乳腺症と非浸潤性乳管がん(DCIS: Ductal carcinoma in Situ)の組織学的鑑別が必要である症例が多くなったことである。

### [5] 3次精密検査

検査の結果、精密検査あるいは、治療が必要とされた場合には、3次医療機関に紹介している。これらの医療機関から報告された診療結果は表5に示されている。2004年度は210人が3次医療機関に紹介されている。乳がんと診断されたものは45人(21.4%)であり、「線維腺腫」33人(15.7%)、「乳腺症」54人(25.7%)、「のう胞」11人(5.2%)であり、「無回答」すなわち追跡不能であった症例は27人(12.9%)であった。

表5 医療機関から報告された診断名(3次精密検査結果)

(1981~2004年度)							
年 度	乳がん	乳腺線維腺腫	乳腺症	のう胞症	その他	無回答	計
1981~88	254	191	133	39	109	183	909
1989~96	182	118	115	12	73	179	679
1997	18	0	2	0	7	2	29
1998	14	6	3	0	4	3	30
1999	14	5	5	1	1	3	29
2000	22	1	2	0	5	3	33
2001	14	5	6	0	3	6	34
2002	23	7	4	0	3	7	44
2003	30	9	7	1	17	10	74
2004	45	33	54	11	40	27	210
(%)	(21.4)	(15.7)	(25.7)	(5.2)	(19.0)	(12.9)	(100)
計	616	375	331	64	262	423	2,071
%	29.7	18.1	16.0	3.1	12.7	20.4	100

表6 年度別の乳がん患者数と発見率

(1981~2004年度)			
年 度	受診者数	乳がん	発見率
1981~88	5,552	254	3.1
1989~96	5,605	182	3.2
1997	638	18	2.8
1998	682	14	2.1
1999	584	14	2.4
2000	607	22	3.6
2001	671	14	2.1
2002	1,145	23	2.0
2003	1,542	30	1.9
2004	1,670	45	2.7
計	18,696	616	3.3

注：受診者数には、要管理者を含む。

### [6] 乳がん発見率と指摘率

乳がんと診断された患者数と発見率を年度別に表6に示す。乳がんと診断された数は2003年度は30人(発見率1.9%)に対して、2004年度は45人(発見率2.7%)であった。乳がんの発見数は増加しているが、同時に疑陽性も増加している。発見された乳がんの大きさ別の病変指摘率は表7に示したとおりである。また、組織型別に病変指摘率をみると表8のとおりであり、DCISの病変指摘率が予想外に高かった。

### [7] 施行された治療法

2004年度に発見された乳がん45例の年齢分布は図に示したとおりである。また、治療法の内訳は、手術しないで抗がん剤投与と照射療法を併用したものは2例で、他の43例は手術を受けている。術式は、定型的あるいは拡大乳がん根治手術を受けた症例は1例もない(表9)。乳房全切除術を受けたものは9例(20.0%)で、腋窩郭清術を施行したものは5例(11.1%)、腋窩郭清術を施行しなかったものは4例(8.9%)であった。乳腺部分切除術26例(57.8%)、腋窩郭清術を施行したものは15例(33.3%)、腋窩郭清術を施行しなかったものは11例(24.4%)であり、センチネルリンパ節生検を行った症例も含まれている。術式不明症例は8例(17.8%)であった(表10)。

データ作成にあたり、看護師(杉山マユミ、米山淳子、芥川佳子)の協力を深謝する。

表7 発見された乳がんの病変の大きさ

(2004年度)					
	1cm以内	1~2cm	2~3cm	3cm以上	合 計
全症例数	7	15	14	9	45
触診	6 (85.7)	15 (100)	14 (100)	8 (88.9)	43 (96)
マンモグラフィ	7 (100)	15 (100)	13 (92.8)	8 (88.9)	43 (96)
超音波検査	6 (85.7)	15 (100)	13 (92.8)	8 (88.9)	42 (93)

\* ( )内は%

表8 発見された乳がんの組織型別病変指摘率

(2004年度)				
	全症例数	触 診	マンモグラフィ	超音波検査
DCIS	10	8 (80)	9 (90)	9 (90)
通常型	24	24 (100)	23 (96)	23 (96)
特殊型	4	4 (100)	4 (100)	4 (100)
組織型不明	7	7 (100)	7 (100)	7 (100)
合 計	45	43 (96)	43 (96)	42 (93)

\* ( )内は%

表9 乳がん患者の受けた手術方式

(1981～2004年度)

年 度	定型的乳がん根治術	拡大乳がん根治術	非定型的乳がん根治術	その他	記載なし	計
1981～88	90	24	62	20	58	254
1989～96	18	3	97	27	37	182
1997	1		11	3	3	18
1998			3	9	2	14
1999			6	5	3	14
2000			13	7	2	22
2001			5	4	5	14
2002			4	12	7	23
	定型的乳がん根治術	拡大乳がん根治術	全乳房切除術	乳房部分切除術	その他	計
2003			1	22	8	31
2004			9	26	8	43
計	109	27	211	135	133	616
%	17.7	4.4	34.3	22.0	21.6	100

表10 発見された乳がんの治療法

(2004年度)

治療法	2003年度	2004年度
手術せず(化学療法のみ)	0 (0)	2 (4.4)
手術	30 (100)	43 (95.6)
部分切除術	22 (73.3)	26 (57.8)
郭清なし		11 (24.4)
郭清あり		15 (33.3)
全切除術	1 (3.3)	9 (20.0)
郭清なし		4 (8.9)
郭清あり		5 (11.1)
定型根治手術		0 (0)
術式不明	7 (23.3)	8 (17.8)

\* ( )内は%

図 発見された乳がんの年齢分布

